

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成16年
4月号

毎月23日発行
通巻404号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成16年4月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



タブノキ 奈良市 川端 一弘さん撮影(文・6頁)

編集部座談会

神ながらの宗教——法主様に聞く (上)

平成元(1989)年2～3月頃

瑞光院にて

聖歌「くじのまじ」

杉本順一 編集部員それぞれが自分のテーマを出して、法主さんに聞いてみたら、それが記事のネタになるんじゃないかということでした……(笑)。
法主 あんまり漠然とした質問かなわんで(笑)。

杉本 そうかと言うて具体的に、私のこの辺はどうなんでしょうと聞くのも、生活相談になりますやろ(笑)。その辺のテーマの出し方が難しい。

法主 こっち返事するのも難しいわな(笑)。

杉本 法主さんとの関わりは、編集部だけやなしに、沢山の人がそれぞれの立場で色々あると思います。例えば大倭の各職場では、その職場なりの心の持ち方みたいなものを、常に聞かしてもらってるわけです。

僕の場合で言うたら、自分自身の「神ながらの宗教」というものが、自分が大倭に居りながら、まとまらない、というところがあります。そやから、この録音を記事にさせてもらうのは、四月号になると思いますねん(※実際には記事になつていない)。ちょうどその時分になったら、新拜殿もかつこついているんじゃないかということ、一つの節目として、法主さんに「神ながらの宗教」というものを、きちつと真つ正面から聞いておきたいと思うんです。

こんな古い『加美のまにまに』を持つ

て来ました。別に字句の解釈しようというつもりはないんですが、一つの糸口になればと思つてます。

『加美のまにまに』の前に、私が大倭へ来てすぐの頃、『大倭教のしおり』という簡単な印刷物を南都印刷が何かで作らしたとありましたやろ。何を載せるかということで、法主さんに話を聞いてた時に、「大倭教の聖歌をみな分かつたら、神ながら分かつた人と一緒やな」というようなことを、チラツと言わはつたんですね。私に言いはつたことだったかどうか分かりませんが、ずーつと心に残つてますねん。

「くにもと」を、私等はただ聖歌だから歌うもんやと思つて、月次祭やの、地鎮祭や棟上げやの、結婚式やの、お葬式やので歌つていけるけれども、あんまり深く考えて歌つてないんちがうかな。めでた事でも不幸事でも、同じ。そういう広さは、やつぱり聖歌ということなんやろね。

聖歌の言葉なりの意味はまあ分かるとしても、やつぱり言葉として出ている心を持つて歌えるともつとええわな。大倭の、仏教で言うたらお経のようなものがうんかな、と思つたりするんです。

子供には聖歌を覚えよと言つたりしてるけども、自分の方が本当に心を入れて歌えるほど、聖歌のことを分かつてんのかと、ちよつと不安があつたりしてね。ずーつと気にしながらも、こんなこと法主さんに真正面切つて一度も聞いたことないんで。

皆さんはどうですか？

大倭というのがある限り聖歌は残つていくもんやろけれども、あまり形だけでね、残つてほしくないと思うんですわ。坊さんによつては経典を読む代わりに、アコーデオンみたいのパラパラつて

やつてはる。あれにはあれの意味があるのか僕は知らんから批判はできないけども、そのうちの大倭でも聖歌を覚えていけるかどうかいうことで、信仰というものとすり替えてしまうようなことありはしないかと。

人はともかく、僕はきちつと踏まえておきたい。形だけが自分の身に付いてしまうのは、非常に怖い。

矢追房子 聖歌はパラパラする程あらへん。

お経は、沢山あるさかい(笑)。

法主 そら、仏教の経典は八万からあると言つかな。

霊界にいる日の聖

法主 ええ質問事項を出してもろたけどな。

まず聖歌「くにもと」のことやけどな、その解釈は難しいのう。一言二言でちやつちやつと言えもんやないで。

……言うてみたら私個人と聖歌とは全然無関係やねん。それは、私の嫁さんが神憑りで作つた歌やねん。始めに何か書いてなかつたか、誰が作つたとか。

杉本 書いてあります。矢追妙月憑り詩、と。

法主 それ私の嫁さんやねん。もう二十五年前に亡くなつてるのやけどな。霊界から言うてくることが聞こえてくるんやわな。そやから私自身が作詞したんでもないし、考えたんでもないねん。

一番の歌詞は、大倭というところが中心みたいな意味のこと出てるわな。大倭が、心の、霊界の元であつて、ここからあつちこち派生して出て行つてる、だから何かの時、ここへ皆、最後は帰つてきたら良いという意味のことを言うているものやと思つねんな。

二番あるやろ。私自身が自分の意志でこれを書いたと思う人がおつた場合に、自惚れもここまできたらちよつと度が過ぎてるなと思われるやろと、私も人間として検討してん。あんたらそう思わへんか。ところが家内は、霊界人に「素直に出せ」とえらい怒られたと言ふのや。

世間の神憑りとか、天啓宗教をおこした人というのは、どこの宗教を見たかて皆、お前が世界を救う、みたいなことばかり言うてるわな。キリストでもそうやし、釈迦でも一緒や。天上天下唯我独尊みたいな書き方しておるわ。

けれども、やつぱり人間としての立場を考えた場合、死んだ後やつたら何言うてくれてもええけれども、生きている間からこんなことを文字に書いて出して……と思たわ。

その反面ね、「こらもうあかん、私はもう氣違にならなあかんのやな」と観念もしたんや。それで一番から五番までを素直に、霊界から来るものをそのまま出したのが、聖歌や。

矢追鈴月 曲の方は、成川(貞)のおばあちゃんがつけるのを、うちやとかおファミ(竹林ファミ)のかあさんなんか聞いてて、「それ、ええなあ」というようなことで決めてん。

法主 あんた等、人間として考えてみいや。私の名前、日聖やろ。霊界人が私を、日聖、日聖と言ふねん。それを、日の聖として歌わすような形なんや。私より立派な人間は、世間にほかすほど居るがな。それに対して私はものすごく引け目を感じてるというか、それだけ気にしとつてん、ほんまは。そんなこと人には言わへんけどな。

家内が、神憑りで言うのを聞いておるとね、肉体を持つている矢追日聖のことと違ふと注意されると言うねん。霊界に、もう一人の矢追日聖が居るんやと。矢追は無いわな、日聖というのが居る

んやと。今、生きているお前のこととは違うと言
うねん。そんなこと人に言うたかて、分からんけ
れども。

例えばね、御霊鎮めしてるやろ。それは肉体を
持っている私がやってるのは違うねん。今言
うている、もう一人の日聖がやってるんや。霊障
害でも、霊界の日聖が言うから、相手がそれを聞
いて鎮まってくれる。生きている私やったら、な
んぼ言うたってあかんねん。そこに意味があるん
やけど、そんなもの説明出来へんわな。

今まで書いたもので、聖歌の説明したことはな
いやろ、一回も。今日は聞かれたから、口でこそ

言うけど、こんなこと言うの初めてや、おそらく。
降誕祭や何や言うたって、そんなこと言うたこと
あれへん。

日の聖というのが霊界に居るんやね。私はそれ
の代行者や。代行して現界で仕事をしている、私
は影やねん。霊界に実体があつて、その影として
現界で動いている、そういうふうな意味になつて
くるんやけどね。そんなん、どないして説明した
らええんか知らんけど。

杉本 法主さんに分からんもの、私らにも分かり
ませんけど(笑)。
法主 書くと言つたつてね、考えてみい、書かれ

くにのもと

矢追妙月 憑詩
成川 貞作曲

一 豊葦原の中津国
青垣山をめぐらせる
大倭 おほやまと
讃へよたたへ 我等が故郷
山かすみ 流れは清し
花香る 稲の波打つ
大倭 おほやまと
還れよかへれ祖神の神園

二 賑栄う日御子天降る
鳥見に生れます救いぬし
日聖 ひのひじり
縫れよすがれ 我等が身親
唯一人 神が選びし
天照す 闇に輝く
日聖 ひのひじり
拝めよおがめ現界の聖者

三 濁世の嵐吹き荒ぶ
劫火は猛り地の上に
世直 よのなほし
進めよすすめ 我等が被禊
夏はわく 冬は氷りて
神ながら 守れ断乎と
世直 よのなほし
悟れよさとれ祖神の啓示

四 金鶏輝く日高見の
鳥見と高千穂あふやまと
和光 わのひかり
仰げよあほげ 我等が生命
東雲に 暁はゆる
二十億 旭は照す
和光 わのひかり
崇めよあがめ祖神の大稜威

五 夕日は沈む生駒山
満月浮ぶ春日野に
六合基 くにもと
知らせよしらせ 我等が楽土
悠遠の 神代ながらの
おほやまと 集へもろびと
六合基 くにもと
踊れよおどれ岩戸の神楽

へんで。
鈴月 「神憑かりが言うた」と言うよりほかにし
ようがないわな。
法主 けど霊界人が言うてくるものやから解釈が
難しいんや。

鈴月 うちが最初、聖歌に対して抵抗感あつたわ。
「思いがりもほどにせえよ」みたいな、な。
ほんでも何やしらん、その時の自分の気持の動き
で、抵抗も何もできへんと素直にフアッとして
歌える時と、もたもたしてな、口に出すのもいや
な日があんねん。これはうちの考え違いやなと思
つて、反省するけどな。

法主様と妙月かあさんとのそういう話のやり取
りは、全然知らんかったわ。
法主 字で読んだら誰かて思うよ。これが世界の
の聖者かいな、て。私はそれは伏せとけと言うた
けど、霊界の人に「どうあつても出さなあかん」
と言われてると言うんやな。

言うてみたら私の場合はね、『イソツブ物語』
か何かに虎の威を借る狐という話があるやろ、あ
れと同じことやねん。私みたいなもの肉体を持っ
ている人間やからな、糞こいてるし、飯も食う。
ちつとも偉いことあらへん。そこへさして知能は
低いは、ものはよう忘れるわな。人間として考え
てみたら、あんまり偉くもないし、あかんことも
ないし、真ん中ごろやな(笑)。

けど後ろに付いている本当の日聖という人が、
霊界に居るんや。その影を肉体に映してくれて
んねん。それによって霊界の者が、言うことをよ
う聞いてくれるねんな。

例えば、文化行事で諏訪大社へ行つた時でも、
一番先に龍神さんが、向こうから礼を低うして迎
えに来はるんやな。そんなこと人に言うたって、
自惚れに聞こえるやろ。本殿に上がつてお祓いし

でもろて神主さんのお話聞いたりね、人間対人間
やから、それはそれでええねん。さてそれが終わ
つたら、私はピューツと引つ張られてしまう。ど
こへ行くのかなと思つてたら、諏訪大社の本当の
靈魂のある位置まで案内して連れて行かれるね
ん。こつちも（鈴月かあさんのこと）付いてきて
つたけど。本殿の中は空っぽやねん。

伊勢神宮に行った時でも、前に下がつてる白い
御帳あるやろ、あれが上がつてしもてん。その時、
私は寒いから堪忍してや言うてオーバー着て襟巻
きもしたままで、お祓いもせえへんし、手も洗わ
へんがな。他には人が居らんようになって、人払
いされてるんやな。そして、御帳が動きだしたか
なと思つたら、本殿が丸見えになるような現象が
出てん。向こうの人がお迎えしてくれてるんやわ
な。けど、あそこに天照大御神さんは居れへん。
居るのは、伊勢地区の固有霊やわ。

今日まで、そういうようなことが沢山あるわ。
それはやっぱり、私の後ろに日の聖という名の
人が居るからやな。その影が私の肉体に映される
ので、御霊鎮めする場合でも、邪霊や憑依霊が治ま
つてくれるんやね。

二番の聖歌でも、出せと言われるのは、そうい
うふうな意味かなと思つてね。その辺のところを、
あんばい解釈してもらつたらええねんけれども。

それ以外のところは、別に、日本の昔の言い伝
えか神話か知らんけど、そういうようなことが、
『古事記』や『日本書紀』と同じような言葉を使
つて出てくるけどね。

房子 法主さんだけでなく誰でも霊界に実体があ
つて、生まれて生きてる人間は影なんですか？
法主 そら影や。肉体を持つてる側から言うたら、
こつちが実体、向こうが影みたいに見えるけどな。
肉体があらへん世界やもの。

(続)

大倭会文化行事

物部氏・蘇我氏決戦の地へ

杉本 順一

平成十六年三月二十一日、前日の雨が止んで、
文化行事には嬉しいお天気となった。出発前に法
主さんの奥津城で挨拶をすると、「トモニユク、
トモニユク」と二度のお言葉があった。

二度のお言葉は私には珍しいことである。共に
文化行事に行つてもらえるというので、お礼を言
つて拝殿に上る。聖徳太子さんに対して物部守屋
公のお墓に参る挨拶をしていると、「ホウシユガ
トモニユクナレバ、ワレモウレシイ」とのこと。
霊界における法主の存在というものを改めて考え
させられた。

次いで「イクサババ キヨメテホシイ」（戦場
を清めてほしい）と言われた。

物部氏と蘇我氏の勢力争いについて考えている
と、太子さん（蘇我氏側）は「あの時は、あの様
にするしかなかった」と、私の疑問に答えられた。
とにかく私達は元気に楽しく行こうと思ひ出発
する。十時三十五分、集合場所の大聖勝軍寺に着
く。三々五々、参加者は集まりはじめ、大人三十
三人・子供三人という大勢の人達が集合した。

文化行事初参加の方々各自紹介をされる。
湯浅芳郎さんに先導されてゾロゾロと国道脇を
歩く。守屋公のお墓は、寺のすぐ近くであった。
前回、私がお参りした時とは全く違う感じで、
今回は明るくさわやかな雰囲気を感じた。

守屋公が迎えにくさわやかな雰囲気を感じた。
守屋公が迎えにくさわやかな雰囲気を感じた。
守屋公が迎えにくさわやかな雰囲気を感じた。
守屋公が迎えにくさわやかな雰囲気を感じた。
守屋公が迎えにくさわやかな雰囲気を感じた。
守屋公が迎えにくさわやかな雰囲気を感じた。
守屋公が迎えにくさわやかな雰囲気を感じた。
守屋公が迎えにくさわやかな雰囲気を感じた。
守屋公が迎えにくさわやかな雰囲気を感じた。
守屋公が迎えにくさわやかな雰囲気を感じた。

時は、あの様にするしかなかった」と言われた太
子さんの拝殿でのお言葉を思い出した。

このあと、国道の南側にある「鎬矢塚」と「弓
代塚」を順次訪れた。鎬矢塚は、守屋公の胸板を
貫いた鎬矢を埋めた所で、弓代塚は、その矢を射
た所とか言われているらしい。

『ながそねの息吹』121頁を見ると、このこ
とについての矢追家の言い伝えが書かれてある。

矢追家の先祖、道麻呂（トモイロ）は、聖徳太
子が幼い頃からの太子付き舎人だったので、蘇我
側について戦いに行った。

三回の戦に負けて、策尽きた道麻呂は、太子と
共に大倭の神に祈願をかけて四度目の河内攻略に
かかり、ついに成功した。祈願した九本の矢のう
ち、道麻呂の射た鎬矢が守屋公を倒したので、そ
の功をもって道麻呂は河内の土地を賜った。その
鎬矢を道麻呂が負つていたというので、やぶらの道
麻呂と世間から言われるようになった。と。矢に
まつわる二ヶ所の塚こそ、やぶら（矢追）の名の発
生の原点と言えるかもしれない。そしてやぶらが、
八尾という所の名前になったとも言う。

塚めぐりのあと、大聖勝軍寺にもどり、広間を
お借りして昼食。現地解散となった。

私は、中村俊哉さんに頼んで太子さんの帰幽の
地、あぐな波葦垣宮跡に行つてもらつた。かつて、そ
こにあった成福寺も、今はない。同行した人達に、
太子さんの亡くなられた話（毒殺とも言われる）
ばかりしていた。「ワラワノコトモ ツタエテク
ダサレ」と女性の言葉。忘れていました、太子さ
んのお妃さんのこと。この方は太子ご帰幽の前日
になくなられた。お名前は分かりませんでしたが
帰つてから膳部かしばの善岐岐美郎女と知りました。

(補遺) 平成15年秋の「泊文化行事報告」

安德陵伝承

東京都町田市 得田 壽之

◇伝承地について

去年の十二月月号の『とおやまと』に壇ノ浦行を書いて、安德天皇陵伝承についてちよつと触れ、各地に安德陵があるのは、平家の落人たちにとつて心の支えではなかつたらうかと書いた。

その後、このことには、もつと切実な理由があったことに気が付かされた。

去年十一月に発行された『歴代天皇年号事典』(米田雄介編・吉川弘文館)をみてみると、「天皇壇ノ浦崩御は遺骸が確認されていないため、脱出隠棲の後崩御の伝説を産み、鳥取、山口、高知佐賀、熊本、鹿児島、宮崎の諸県で十か所余に及び、内五か所が陵墓参考地になっている」とある。この説は高みの見物のだけけれど、一応、宮内庁陵墓課に問い合わせせて現在地の確認をしてみる。

①熊本の花園 ②山口の西市 ③鳥取の宇部野
④長崎の佐須 ⑤高知の越知だつた。

次に『九郎義経の謎―三人の義経―』(伊藤加津子著・81年・共栄書房)を読んでみる。ここには「所在が分からなくなつたものも含め、西日本だけでも六十ヶ所ほどの安德陵があると言われている」とあり、宮内庁も認めず学者などにも見直されていないという⑥大阪府豊能郡能勢町にある御陵伝承地と、高知県越知町の陵墓参考地の横倉山についての詳細が五十ページほど書かれてある。さらに、『安德天皇と日の宮幣立神宮』(柞木田龍善著・平成7年・人物往来社)をみてみる。ここには、全国の安德陵伝承がとりあげられ、その

中には⑦長崎対馬の厳原町 ⑧山口の長門王居止
⑨鳥取の姫路 ⑩鳥取の中津 ⑪三重の知盛山久昌寺 ⑫鹿児島島の牛根 ⑬硫黄島(鬼界島)黒御所 ⑭高知の高坂山の三ノ森 ⑮高知香北町の御在所山 ⑯愛媛県宇摩郡切山村が加えられ、一部逃亡経路が辿られている。

それにしても、なぜ安德陵伝承がこんなにも多く広範囲に点在しているのだろうかと改めて思う。まず平家軍の主力のほとんどが壇ノ浦に沈んだと思われているようだが、実際にはかなりの人数の公達や武將たちが水軍の働きによって広い範囲の各地に逃れているようだ。

このことの気配と噂を鋭く感じ取っていたのは頼朝で、各地に素早く兵を送り、執拗に追討させている。那須の与一に日向(今の宮崎)の椎葉の山間の落人の追及と捕縛を命じている。与一は病氣だつたので弟の大八郎が出向いている。四国阿波(今の徳島)の祖谷山、土佐(今の高知)へも多くの追討軍を送っているばかりか硫黄島にまで兵を送り落人の探索をさせているという。この結果、逃亡する平家の落人と追跡する源氏の追討軍との間には度々小競り合いが起り、切迫するニアミスの緊張がつき舞台は複雑に拡がっていったと思う。

その上、頼朝は阿蘇管領をつくり阿蘇で巻狩りをして落人の炙り出しを謀った。目的は安德天皇の確保と三種の神器の奪取にあったのだと思う。

◇身代わり、偽装陵、時間稼ぎ

頼朝は安德天皇の身代わりと壇ノ浦脱出を確信していたと思われる。大阪の能勢伝承には安德天皇を護つてこの地まで落ち延びたという従四位上侍行左少弁藤原経房という人の遺言の写しが残されていたという。旧『東郷村史』に載つたという遺言の全文の中には「安德天皇の脱出計画を図つ

たのは二位の局で、脱出の船を出した後天皇の着物を着せてあつた知盛の末つ子を抱き壇ノ浦の海に入られていった」と書かれているという。

真相は分からないが、こう書かれているのは注目していいし、脱出の経過が詳細に書かれてあつてリアリティがあり、推測と想像を助けてくれる。

さて、これを一つの仮定とすると必死に逃れる平家内部では事前に天皇脱出計画が知らされており、状況が切迫するごとに追つ手攪乱と逃亡の間稼ぎに偽装陵がいたるところでつくられたことは十分に考えられると思う。ここでも身代わりが立てられたり、単なる見せかけの陵墓の周辺に噂が流されたこともあつたのかもしれない。

熊本の、⑯蘇陽町の伝承地が現参考地の花園の元地であつたことと、重い石棺が残されていた点、隠蔽工作が考えられる点などで、「何か」が語られているように思われるが、ここではこれ以上に深追いしないことにしようと思う。まだまだ追跡不足でもあり、紙数も尽きようとすることもあるが、何よりも去年の十月二十七日、阿弥陀寺陵の正門前で大倭会の参加者の皆さんが安德さんと交流されたことで充分だと思ふからだ。

高知越知町の横倉山は平家の遺品が多いことと、この山全体で祀られている方が多岐に亘つている点、ここに二十五軒の家が建てられたことも考え合わせると、「安德帝御陵伝説確証記」の記述にかかわらずに永年に亘つて落人たちの慰霊の拠点になつていくような、稀な自然条件があるのだと思われる。

この伝承に全く気付いていない三十年くらい前に、越知の山奥の保育園に知人を訪れたことがある。そのことを想い、安德さんが杉本順一さんに送つてこられたという念「祀られているが寂しい」の真意を深く察したいと願ひ始めている。

表紙写真 タブノキをめぐる

奈良市 川端 一弘

■身近でできる観察

奈良県では若葉が萌える四月下旬から五月初旬、常緑樹のタブノキは新芽の展開を迎える。と同時に新芽の先に花が開き始める。花弁の色は少し黄色味を帯びた薄緑色で小さく目立たない。赤味を帯びた新芽の美しさに比し地味である。

近くの公園（大倭神宮にも近いです）にタブノキが植えられていることに気付いたのは、植物に関心を持ち始めた十年ほど前である。タブノキは住宅地が造成されたときに公園樹として植えられたもので、その時すでに二十五年ほど経過しており、気付いたときには成木であり毎年花を付けていた。観察するには好都合の木である。

観察して最初に知ったのは、花を持っている芽と持たない芽の大きさが異なることである。花芽と新芽とが別々である種類と異なりタブノキは新芽の下部腋に花芽を展開するために、新芽の大きさが異なるのである。花芽をもつものは紡錘状に大きくなり、持たないものの倍以上の大きさがある。このことは写真を撮るものにとつて、あらかじめ被写体を決めておける利点があった。

果実は七月中旬ころ（図鑑では八、九月とあるが、私の観察では八月には全て落実している）に成熟する。1cmほどの丸い実である。濃緑色であるが完全すると暗紫色となる。小鳥が食べるには少々大きい、ムクドリが食べているのを観察したことがある。また、川上村の大滝ダム水没地域を観察したときに、サルが実を食べていて、木の下に入った私を鳴き声や木を揺すり威嚇した。サールに先入権があり、木から離れてやると安心したのかおとなしくなった。

■どういいう木なのかを知る

今年二月の大倭神宮月次祭のおり、バス停で林修三氏と出会った。このとき林氏よりタブノキについて質問を受けた。日本海側の神社社叢にはタブノキが見られることから、タブノキは朝鮮半島からの帰化人がもたらしたもので？というものであった。社叢をたいへんよく観察をされておられることに感服した。

タブノキは暖帯性の樹木であるが、日本海側は秋田県辺りまで（主に海岸沿い）生育しているようである。私は太平洋側では宮城県松島で見たとある。さらにもう少し北部、岩手県まで生育しているようである。帰化人が持ち込んだものでなく、自生しているものである。

奈良県では、南部は勿論、吉野川流域のかなり上流域まで生育している。奈良市近辺では春日山原始林に記録があるが現在では確認されていない。私が布目ダム近くの北野山町の社叢で小さなタブノキを見付けたときには少し注目された。しかし、すでに奈良教育大の北川尚史教授が春日病院バス停付近で確認されておられていた。奈良市ではこの二例だけが現在確認できるものである。

現在は科学が進歩して、土中に残った花粉の分析で過去の植物の生育が確認される時代である。だが、タブノキの花粉はその形骸が残らず、花粉分析では確認することができない。早くから開けた奈良盆地では、原始の植物の生育状況が全く崩れ変化して、タブノキも成育状況がよくつかめない。大倭近辺でも生育していたのではと想像はするのですが。

このタブノキの樹皮は染料として利用される。

八丈島のものが黄八丈、秋田のものが秋田八丈という。私は染色や着物について疎い。大倭会会員には染色をされている方がおられる由、禊会などでお話を伺いたいものである。

暖地性のタブノキが海岸沿いであるがかなり北部まで生育していることの理由はまだ説明されていない。鳥が運んだという解説があるが、説得力に欠けている。

タブノキはクスノキ科の暖地性の樹木である。クスノキに比べて耐寒性があり、成木では時々雪には耐えられるようである。

■自分で植えてみる

庭にタブノキの種子を十五粒ほど植えてみたことがある。翌年春を楽しみにしていたが、一株芽吹いただけで発芽率は非常に悪かった。その原因を尋ねると、もしかすると鳥の消化による手助けが必要かも知れないと助言をいただいたりした。その年もまた種子を植えてみた。今度は種子を保存せず、採集した種子をすぐに植えておいた。すると種子はすぐに全て発芽して、八月末には二、三枚の葉をもつ幼木となった。これは川上村で自然状況のタブノキを観察したものと同じであった。落下した種子はまず根を出しすぐに発芽する。そのため適度の湿潤を必要とし乾燥を嫌う。

この幼木の葉は充分に成熟しておらず冬の雪には耐えられない。冬は木の下で庇護された幼木のみ越冬が可能となる。つまり積雪地帯では常緑の木の保護がなければ生育できないのである。

林氏が社叢にタブノキを見たことには理由があったのである。人間が森を伐採するとタブノキは一度絶滅する。その回復には幼木の生育条件が必要で、そのためには長い年月を必要とする。自然破壊の回復は容易ではないのである。

「隆家」の頃の法主 (8)

兄の結婚話

矢追 隆 義

大学卒業後、間もなく兄の結婚話が持ち上がった。母の妹の娘で、N子さんという女性であった。家は吉野大淀村で、奈良県立高田高等学校（当時、県下では高等学校は二校のみだった）の卒業生であった。兄とは文通もしておつたらしく、ある春の日、彼女の案内で、兄に連れられて吉野山を散歩したことがある。うまく利用されているとは知らず、彼女の持参した弁当を竹林院で頂いた時の様相は、今でもはっきり脳裡に残っている。

やがて彼女との縁談話が進むことになり、親族代表として、父の弟である矢追政一叔父が面談することになる。当時、彼女は高島屋百貨店の女店員として勤めていた。そのことは、叔父は全く知らなかったらしく、帰るなり、あの娘は職業婦人ではないかと一喝、今の時代では到底考えられないが、この話はこれまでとなつたらしい。

その後も身内を含め、いろいろな方面から縁談話はあつたが、帯に短し褌に長しで、結局、「大倭鴉龍会」の後援会長として物心両面より貢献されていた、母の信者でもあつた成川栄三郎氏の娘さんへと話が進んで行く。だが、そこに困つた問題が持ち上がる。

成川家には二人の娘がおられ、兄が望んだのは姉の方だった。当時の戸籍法では、子供たちが女性の場合、相続資格は長女に限られていたため、嫁として長女を出すことは出来なかつた。そこで家族会議の結果、専門家の指示に従うことになつた。その指示とは、矢追家には兄の他に弟が

二人いて男子が三名いるから、弟の一人が成川家と養子縁組手続きを取ればよいということだったらしい。もちろん、後日、離縁するという約束のもとである。

これで成川家の長女を、兄の嫁として迎えられることになるが、本人が知らぬ間に成川家に籍が入ることになったのは、末の弟の隆盛であった。この一件がまた尾を引き、大倭菅谷時代に兄を苦しめることになる。

時の波蕩(その八)

現界と靈界をつなぐ

林 修 三

現代の奇跡とも思える科学や化学の進歩に比して、あまりにも単純な人と人の和合、争いのない世界の確立が何故実現され得ないのだろう。否、その答は明確に自分自身の身の廻りに存在しているのだけだ……。

本年の一月二十六日、大倭靈界の作り出す不思議の流れに乗って、私と妻の順子は臨済宗の総本山、京都建仁寺にある門外者非公開の開山堂の内にいた。堂内には開祖栄西師のお墓に並んで、建仁寺開基である源氏の第二代將軍源頼家公のおまつりされている場があつた。頼家公は源頼朝、北条政子を両親とし、数々の政変、権力争いに巻き込まれ、二十三才で非業の死を遂げられたのであるが、思えばその死は源平十万の激しい争いの後に、その流れを引き継ぐかの様に、それから長年に亘つて続く鎌倉幕府内での権力争いの始まりを意味するものであつた。三代で跡絶えた源氏の血統の中でも、一番印象うすき方ではあつたのだが……。

一月二十二日の深夜、就寝前の数分を法主の著

作を読ませていただく習慣を持つ私は、日中の疲れによるあまりの睡魔に、その日はわずか数行の文を読むだけであつたのだが、その活字の中にあつた鎌倉二代將軍頼家公の名前が奇妙に印象に残つた。と同時に何かのメッセージを受けた感があつた。それから数日、そのメッセージはその後起こつた数々のエピソードと共に次第に確固たるものとなり、頼家公をご供養申し上げたいとの念いは私の心の中で次第に高まつてきたのである。

必然の機は動き、数日を経てそのまつりの場に立てた私は、急遽買い求めてきたおはぎやお酒、お水を前にして大倭式のおまいりを行わせていただいた。その際、案内の雲水さんの前で声高らかに「くにもと」一節を唄わせていただいた。人気が薄暗い堂内に響き渡つた大倭の心歌は頼家公や栄西師には、どう受けとめていただけたのだろうか。

念ずれば通ず。——大倭に縁ある者は、現界、靈界をつなぐ命に精進すべき秋が正に今来たのだと、改めて感じ入つた次第である。同時に、本年の鎌倉への秋の大倭文化行事への布石、すでに打たれつつあるとの思い、強きものを感じるのである。

いほれすまふ

福井市 齋藤 正宏

鏡池を取りまくソメイヨシノが盛りを迎える四月上旬、紫陽花の谷はしばし匂い立つような空気の底深く沈みこむ。濃密な春の気底から空を見上げれば、「ケキヨ・ケケキヨ」と鶯の放つ透明な響きが、いくつかの波紋となつて水面をひろがつてゆく。やがて花びらが音もなくこぼれ、鏡池一面を埋め尽くす頃、風に揺れる枝垂れ柳は、青空や白い雲とともに拝殿の前景を彩る御簾となる。

新緑の季節がはじまる。今年は、どのような芽生えを育んでいるのだろうか。

あじさい日誌

3月14日 祝会。大阪高槻市の松原寛治さんと姪の平泉直美さん（今春、北大に入学）が初参加。川端一弘さんからは古い記録写真を見せてもらいながら春日原生林の話をお聞きました。

3月15日 大倭神宮月次祭。

3月21日 第277回大倭会文化行事。4頁の報告をお読み下さい。（写真は「物部守屋大連墳」。囲いは数年前に募金により整備されたものとのこと。ちょうど大分出身の物部姓の男性が、ご先祖さんかもしれないからとお参りしてお掃除をしておられた）



夜、大倭会館で茶道のサークル「寸茶の会」が行われました。先生役の北川善明さんが大倭殖産（株）を退職されることにな

り送別会も兼ねてとのこと。
3月22日 福岡県宗像市の吉橋雅道さんが来邑されました。
3月23日 大本宮月次祭。

午後4時より大倭会館で大倭会役員会。決算・予算、年間行事、役員改選について話し合い。新役員は次の通りです（任期2年、順不同）。【名誉会長】矢追家麻呂、【会長】中西正和、【副会長】矢追盛賢・矢追美壽紀・中島健・且田容子、【常任幹事】杉本順一・平谷照子・湯浅芳郎・川端一弘・岸田哲、【幹事】

武政和夫・石田昌男・反保隆臣・水野勝美・杉浩史・菅寿雄・林修三・山崎正知・並河哲男・溝口ツヤ子・高橋良美・藤林峯子・藤田啓子・松本モト・矢追房子・岸野春子、【会計】野保夫、【監査】井手泉
3月27日 大倭会館でボランティアグループあじさいの箱総会。会員の皆様一人一人のご厚志が大きな玉となって大倭安宿苑と大倭病院に寄付されました。代表の且田容子さんの話等で24年間の活動を振り返り施設交流のひとときを持ちました。
3月28日 野草社編集部員で元邑人の塚田高哉さん一家5人（北海道上川郡）が突然、邑に立ち寄られ、嬉しい驚き。またゆつくり来て下さいね。

4月1日 邑の中島充世さんが大和郡山市のライフィン郡山（母子寮）の職員として仕事を

始められました。
4月2日 昇ちゃんは、来邑中の陶芸家・中野英樹さん（栃木県）が大阪の美術館等へ行くのに連れて行ってもらいました。

学園前にもどった時、やはり邑に来ていた山本あきさん（小金井市）が帰るのにばったり会い、一緒にお茶を飲んだのがまた楽しかったらしい。昇ちゃんがおごってくれたそうです。

4月4日 大本宮拝殿を会場に故大倉佐和子さんをしのんで紫鳳会主催の第15回第三絃演奏会が行われ、雨の中、満員の来場者でした。会場に佐和子さんの存在を実感した人も少なくなかったようです。
4月6日 大倭神宮月次祭。

夜、大倭会館で邑倭の会。
4月8日 午前11時より大本宮拝殿で須佐緒祭が行われ、その後、拝殿の底で恒例の園遊会を楽しみました。
4月10日 夜、「桃谷樓」で邑交会。この日朝からは邑交会有志と大倭にゆかりの人達の合同コンペがあり、その流れで臨時参加が増え大賑わいでした。
入学・卒業
中島安佐美ちゃんが中学に、反保恵莉奈ちゃんと竹本千阿貴ちゃんが高校に、それぞれ入学しました。
大倭安宿苑では
3月19日 大倭墓地で住苑者・職員が物故者の慰霊祭を行いました。

した。
4月1日 10名の新採用職員が辞令を受けました。
主な異動では、矢追明昌さんが長曾根寮と八重垣園の施設長に就任。前任の矢追美壽紀さんは理事長に専念されることになりました。

（菅原園）
4月5日 大阪城公園へ家族・職員を含め11名が厨房の豪華手作り弁当を持ってお花見に行きました。

（須加宮寮）
3月31日 作業活動の1年を締めくくり労をねぎらう作業納め会がありました。
（長曾根寮）
3月20日 家族会とあじさいの箱のボランティアの皆さんが着物姿で華を添えお茶会が催されました。

5月15日（土） 午後2時より大倭神宮にて。
* 月次祭（大倭神宮）
5月23日（日） 午前11時より大倭大本宮拝殿にて。教務本庁の都合で今月のみ時間変更です。

（八重垣園）
3月21日 家族も参加し地域交流会のパーティを行いました。
3月24日 俳句の会。「句の道に生き甲斐つけ春うらら」
「塀ごしに梅の香匂う散歩道」

* 月次祭（大倭神宮）
5月6日（木） 午後2時より大倭神宮にて。
* 大倭会主催第四二六回祝会
5月9日（日） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

あんない

第279回 大倭会文化行事 

新緑の洛北に古寺を訪ねる

高山寺 神護寺方面へ日帰りバス旅行

- 日 時：平成16年5月16日（日）
午前8時30分集合
- 場 所：奈良国際ゴルフ場前
- 費 用：4,000円
- ルート：奈良大倭……木津IC……城陽IC……高山寺……神護寺（昼食）……嵐山高雄パークウェイ……嵐山……城陽IC……奈良大倭
- 申込み：世話役に5月10日までに
定員あり
- ※ 昼食持参、雨天決行
- 世話役：湯浅芳郎 電話 0742-48-3389